108 学年度第 1 学期　ワンアジア財団国際講座

「人文通識：アジア共同体:東アジア学の構築と変容」シリーズ講座(2)

題目:水戸徳川家の文教事業―東アジア文明の発展を中心に

第 2 回ワンアジア財団国際講座は、徐興慶学長が特にお招きになった日本の徳川ミュージアム館長の徳川真木先生にご来臨いただき、ご講演を賜った。徐学長は、このような学術的な場は誠に得難く貴重な機会であることを述べ、また特に学生のために知識的な背景を 2 点補充した。先ず、徳川ミュージアム収蔵の宝物の中で、日本の徳川時代から近代までの歴史を通じて、特に徳川館長が提示した収蔵資料のうち、明治維新に直接関係した人物として、江戸幕府第 15 代（最後の）将軍だった徳川慶喜のことを挙げた。次に、徳川家のいわゆる御三家とは、徳川家康が西暦 1600 年の関ヶ原の戦いで勝利した後、第 11 子の頼房を水戸に、第 10 子を和歌山の紀伊に、第 9 子を尾張の名古屋に各々住まわせ、三家を併せて御三家としたのだ、ということを説いた。その上で、徳川館長が水戸家の第 15 代に至って伝わる名家の後裔であり、館長ご自身は第 15 代「ご当主」の奥様であり、300 有余年の歴史と 30000 件以上の収蔵品を持つ徳川ミュージアムの運営を担っていることを説明した。以上の徐学長の簡単な紹介を経てから学生たちは今回の講演を謹んで傾聴したのである。

徳川館長は先ず、17～19 世紀の江戸時代の徳川家の東京におけるエピソードを紹介した。1603 年、徳川家康（生没年西暦 1543―1616）が江戸幕府を開く以前の江戸は荒れた湿地帯であったこと、その後、家康の孫の一人である水戸黄門こと徳川光圀の時代までの三代を経て遂に中国や朝鮮王朝が賞賛する文化の都としての江戸が完成に至ったことを述べた。本日、館長先生が「水戸徳川家の文教事業―東アジア文明の発展を中心に」と題したのは、水戸徳川家が初期に実行した文教政策に焦点を当て、その政策によって如何に短期間のうちに江戸に平和を齎し、民衆文化が超高水準の社会の中で養われたか、というこ

とを一覧してもらうためである。その政策で重視される際に先生が注意を促したのは、家康が採用した初期の儒学は直接的に中国から摂取したのではなく、日本の儒学者が文献を通じて学んだ儒学だったということである。その後、家康は、子の頼房（生没年 1603—1661）に神道哲学を学ばせ、同時に儒学者の林羅山に儒学を学ばせた。頼房は政教分離を望み、宗教が政治に介入して政治的に不安定化する状況を招くことを避けた。頼房は儒学を先祖を祭る方法となし、親が世を去ると墓地と祭祀儀礼を定めた。その後、家康の三代の孫である徳川光圀（1628—1700）が水戸藩主を務めた時期に、江戸は 100 年の間に水稲栽培が成され、庶民が自由に移動できる、商業システムの完備した地として建設された。すべての都市機能が完備した後、民衆道徳の水準が高まり、第 3 代から第 5 代の将軍の時代に法律制度も整備され、徳川光圀は庶民の知識を向上させるための出版政策を始めた。光圀は農民に愛される藩主として仁政を施し、歴史書編纂事業を始めて、『大日本史』を編集させた。光圀の没後、水戸徳川家は歴史書編纂事業を継続し、1906 年になって遂に 249 年の歳月を掛けて全 402 巻に及ぶ膨大な『大日本史』を完成させた。

講義中、徳川館長先生は徳川ミュージアムを紹介する動画を上映した。動画の中では、収蔵品とともに歴史・国学・文学・芸術・科学の 5 種の研究的価値を示した。また、総合的な文献調査と遺跡調査の成果が徳川ミュージアムの新しい展示の情報となった。徳川ミュージアムの基本理念は「彰往考來（過ぎたるを彰らかにし、未来を考える）」というもので、『春秋左氏伝』から得た言葉であり、過去の出来事を明らかにしなければ、未来を創造することはできないということである。さらに付け加えると、水戸の徳川ミュージアムは水戸徳川家の完全な歴史資料を閲覧できる唯一の施設であり、その収蔵品は高度な歴史と芸術的価値を持ち、日本の豊富な文化が包含されており、海外・国内から栄誉を讃えられている。徳川ミュージアムと参考室もまた調査研究に活用されて、その成果が広く知られ、世間の人々のために収蔵品が公開されている。

（Web サイト連結：https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php）

(原稿:蔡珮菁・日文系副教授)
(翻訳:齋藤正志・日文系副教授)